

柏原市東山地区分布調査概報

—国道25号線バイパスに伴う—

1991年度

1992年3月

柏原市教育委員会

は し が き

柏原市の東山地区は、古墳時代後期を中心とした非常に沢山の古墳が広範囲に密集している地域である。これだけ多くの古墳を築造した背景には、古墳の被葬者となる身分的地位の人々が存在したこと、巨石を使用して古墳を組立る技術があったこと、また、経済的基盤が充実していたことがあげられる。

今回、東山地区における国道25号線バイパス道路の建設が計画され、これらの文化財が現在どのような状態であるのか、保存に対してどのような影響があるのかを分布調査したものである。既に精密な分布調査が行なわれている地域もあるが、先の主旨に沿って古墳の存在確認のみに限定せず祭祀遺跡や集落遺跡等幅広く探索項目を持ち実施した。

実際に分布調査を行うと、荒廃した場所や地形が大きく変更した場所あるいはビニールハウス栽培等によって調査が行えない地区が少なからずあり除外せざるを得なかった。しかし、調査の対象とした地区の大部分は踏査して本書に報告する通り古墳の新発見や遺物の散布地を確認する等の成果を得た。

今回の調査に対して、ご理解とご協力をいただいた調査関係者並びに地元の方々には深く感謝すると共に、これを機会により一層の文化財保護へのご援助、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成4年3月

柏原市教育委員会

教育長 庖 刀 和 秀

例 言

1. 本書は、柏原市教育委員会が平成3年度に実施した国道25号線バイパス建設に伴う柏原市東山地区分布調査の概要報告書である。
2. 分布調査は、柏原市教育委員会社会教育課文化係北野 重を担当者として平成3年12月3日から平成4年3月6日まで実施した。
3. 分布調査と本書作製にあたって、土地の立入等にご協力を頂いた地元の人々及び各地区区長に厚く御礼申し上げます。
4. 調査協力は、次の方々です。

藤田昌宏	空山 茂	山田顕章	安村俊史
石田成年	寺川 款	生駒美洋子	津田美智子
坂口文子	山口 剛	西島伸彦	大学康宏
棕本徹夫	浅野孝行	尾野知永子	奥野 清
谷口鉄治	乃一敏恵	有江マスミ	
5. 本書の執筆は、北野 重が行った。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の方法と目的	2
第1節 調査の方法	2
第2節 調査の目的	3
第3章 調査結果	4
第1節 遺跡群	4
第2節 古墳群	5
第3節 民俗	9
第4章 まとめ	10

挿 図 目 次

- 図-1 分布調査区割図
- 図-2 大県郡条里の地籍図
- 図-3 柏原地区の民俗

図 版 目 次

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 図版1 新規発見の古墳その1 | 図版12 柏原市内の鍛冶関係遺物出土地 |
| 2 新規発見の古墳その2 | 13 平野・大県支群新規発見古墳 |
| 3 平尾山支群第13支群地形測量図 | 14 平野・大県支群 |
| 4 平尾山支群第13支群1号墳 | 15 平野・大県支群石切場 |
| 5 平尾山支群第13支群1号墳 | 16 平野・大県支群第6支群 |
| 6 平尾山支群第13支群1号墳 | 17 平野・大県支群第6支群 |
| 7 平尾山支群第13支群2号墳 | 18 平尾山支群第13支群 |
| 8 平尾山支群第13支群3号墳 | 19 青谷支群 |
| 9 平尾山支群第13支群4号墳 | 20 青谷支群 |
| 10 平尾山支群第13支群5号墳 | 21 雁多尾畑地区 |
| 11 平尾山支群第13支群6号墳 | 22 民俗調査 |

第1章 調査に至る経過

柏原市の北東部は、東山と呼ばれ生駒山地の南端部に位置し、大阪平野の居住地から緑地帯として重要な役割を持っている。

この東山地区において国道25号線バイパスの建設計画がおこり、昭和55年、建設省は大阪府教育委員会及び柏原市教育委員会に路線計画の文化財に関する基礎的資料を得るために踏査並びに観察による分布調査を依頼した。その結果は、柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書として報告されている。

その後、この東山地区に開発の波が押し寄せ建設予定地を変更せざるを得ない事情が多方面から生じて、再度ルート変更や道路幅が検討される事になった。

平成3年、建設省は、柏原市教育委員会に対して、東山地区の中へ国道25号線バイパスを通す幾つかの案を提出し、基礎資料作製のための分布調査を依頼した。

この分布調査は、現在確認されている周知の遺跡（古墳を含む）の再確認と新たな遺跡が存在しないかどうかを目的として実施した。

費用は、建設省が負担し、調査の実施は柏原市教育委員会が責任を持って行う事となった。実施にあたって、各地区の代表区長に文化財分布調査の説明を行い地区内の土地所有者に対して協力して頂くように依頼した。また、柏原市教育委員会においても必要に応じて、土地所有者の許可を得て、土地の立入りを行うようにした。

調査は、平成3年12月3日より平成4年3月6日まで実施した。方法と目的は、次章で述べる通りである。

調査の結果、各地区において、新規の古墳の発見と遺物の散布地を見つけた。既存の古墳は、大概遺存していたが、下草が生い茂り確認困難な古墳もあった。

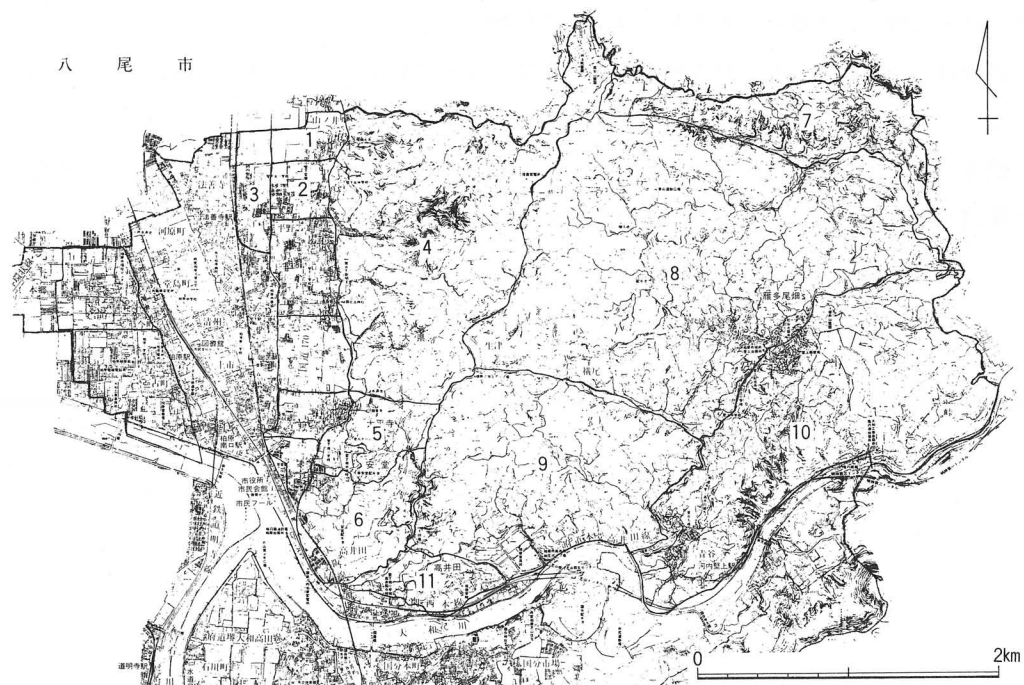
第2章 調査の方法と目的

第1節 調査の方法

柏原市東山の丘陵上に広がる平尾山古墳群を中心とした遺跡の分布調査を実施した。遺跡毎及び古墳群毎（平尾山古墳群は広域になるので支群別）に地区を区割した。

- 1…山ノ井遺跡（山ノ井地区・法善寺地区）
- 2…平野遺跡（山ノ井地区・法善寺地区）
- 3…大県郡条理遺跡（法善寺地区・平野地区）
- 4…平野・大県支群（平野地区・大県地区）
- 5…大平寺遺跡（大平寺地区・安堂地区）
- 6…安堂支群（安堂地区・高井田地区）
- 7…本堂支群（本堂地区）
- 8…雁多尾畑支群（雁多尾畑地区）
- 9…平尾山支群（雁多尾畑地区・高井田地区・青谷地区）
- 10…青谷支群（青谷地区・峠地区・雁多尾畑地区）
- 11…高井田古墳群（高井田地区）

の11地区を対象とした。



図一1 分布調査区割図

第2節 調査の目的

今回この調査の契機となった目的は、国道25線バイパスの道路予定地内における遺跡群について、その現状を把握し、今後のルート決定にあたっての文化財保護行政の基礎資料作成である。

調査の対象とした文化財項目は、

- 1) 集落遺跡の位置と遺構及び遺物の確認調査。表面採集と写真撮影。
- 2) 平尾山古墳群内の古墳の確認調査。写真撮影。
- 3) 遺物散布地における遺構又は遺物の採集。写真撮影。
- 4) 指定文化財及び民俗関係遺物の確認調査。写真撮影。
- 5) その他参考となる事項。

を中心とした。

調査の実施は、既存の文化財地図で確認している項目を重点的に確認し、さらに予定地内で新規の遺構の発見を行う目的とした。

柏原市東山地区における調査

- 1970 大阪商業大学『柏原市太平寺古墳群・生津・横尾古墳群実測調査報告』
- 1971 近畿大学付属高等学校地歴研究同好会『雁多尾畑古墳群踏査の記録』
- 1972 大阪府教育委員会「柏原市安堂山古墳の調査結果」『大阪府教育委員会月報』24-11
- 1973 大阪文化財センター『柏原市本堂所在亀の瀬、本堂地区内埋蔵文化財分布調査報告書』
- 1973 大阪文化財センター『亀の瀬地すべり対策工事に伴う柏原市雁多尾畑地区埋蔵文化財分布試掘調査報告書』
- 1973 大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在村本建設株式会社開発計画地内埋蔵文化財分布調査概要報告書』
- 1974 大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡・試掘調査報告書』
- 1975 大阪府教育委員会『平尾山古墳群分布調査概要』
- 1979 河内考古刊行会『河内太平寺古墳群』
- 1980 大阪府教育委員会『太平寺古墳群』大阪府文化財調査報告書第33編
- 1980 大阪府教育委員会・柏原市教育委員会『柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書』
- 1980 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』
- 1981 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』
- 1983 柏原市教育委員会『太平寺古墳群』-安堂配水池に伴う発掘調査-
- 1984 柏原市教育委員会『平尾山古墳群』1983-VI
- 1984 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1983-II
- 1985 柏原市教育委員会『鳥坂寺』-寺域の調査-1985-V
- 1986 柏原市教育委員会『高井田横穴群I』1985-VI
- 1986 柏原市教育委員会『高井田遺跡I』1985-VII
- 1987 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1986-I
- 1987 柏原市教育委員会『高井田横穴群II』1986-VII
- 1988 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1987-I
- 1989 柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1988-I
- 1989 柏原市教育委員会『平尾山古墳群(雁多尾畑49支群)』1988-VII
- 1989 柏原市教育委員会『高井田横穴群III』1990-II
- 1990 柏原市教育委員会『平尾山古墳群』『柏原市所在遺跡発掘調査概報告』1989-III
- 1990 柏原市教育委員会『平尾山古墳群雁多尾畑第2支群』1989-VII

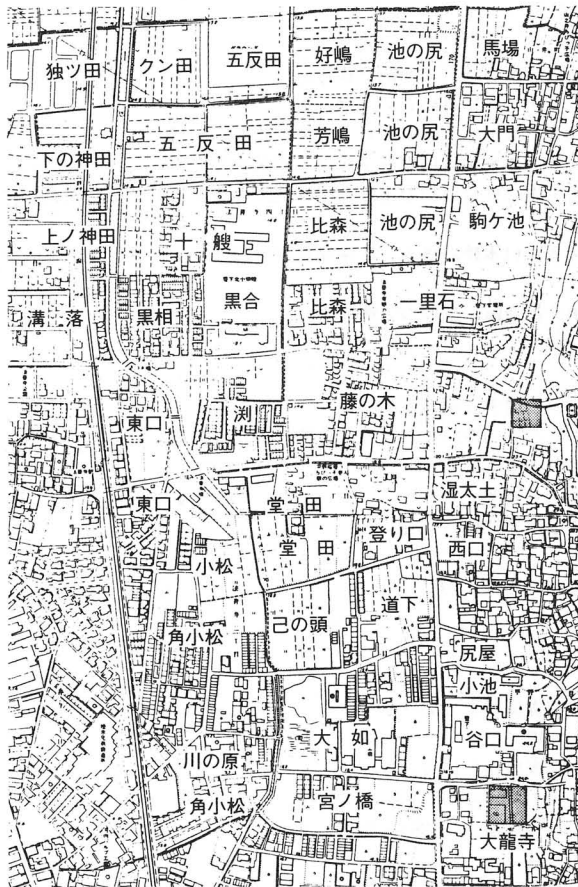
第3章 調査結果

第1節 遺跡群

今回の調査で実施した遺跡は、山ノ井遺跡・平野遺跡・大県郡条里遺構である。それぞれについて成果を述べる。

1. 山ノ井遺跡

柏原市山ノ井、法善寺内に広がる集落遺跡である。当遺跡は、生駒山地西麓部に広がる弥生時代から歴史時代までの複合遺跡である。丘陵寄りの場所で植木畑や田の耕作土に土師器及び須恵器等の土器類の散布を確認した。旧国道170号線より以西は、土器類の散布はなかった。しかし、恐らく遺跡深度が深いため表採されないだけであろう。



図一2 大県郡条里の地籍図

2. 平野遺跡

柏原市山ノ井、法善寺にあり、山ノ井遺跡の直ぐ南側にある弥生時代から歴史時代まで続く複合集落遺跡である。分布調査によって遺物の採集は出来なかった。これまでの調査によると、現地表下2.0～4.0m下層で遺物包含層及び遺構を検出している。その範囲については、南北には山ノ井、大県遺跡が接して、東側は丘陵裾まで続くが、西側は明確でない。恐らく恩智川までと考えられるが今後の検討が必要である。

3. 大県郡条里遺構

大宝元年（701年）に施行された「大宝令」には、「およそ田は、長さ三十歩、広さ十二歩を段にせよ、十段を町にせよ」と条里制地割を目指していたことがわかる。現在は、産業の発展による開発や大規模なほ場整備によって地形が大きく改

変しているが、少し以前は全国いたる地域に方形区画に整地された農地が見られた。大きく分けてその一坪（一町）を細長く割る長地型地割と巾広の坪に区切る半折型地割がある。その開始時期は、大化改新より以前か以後かの論争があるが、現在では、大宝令以後に全国的に進められたと考えられている。

大県郡条理遺構は、南北方向1100m、東西方向500mの範囲で考えられているが、近年の開発の波によってわずかに北側一部でその遺構を確認しうる。北側は、高安郡との境から始まり南側は、恩智川が区画線を添って流れているようで端部は乱れて、よくわからない。東側は、東高野街道までと考えられるが、道路が生駒山地西麓部へ伸びる所もあり今後の検討が必要である。西側は、古大和川の氾濫源があるため乱れが目立つようである。

大県郡条里に関する文献として次のものがある。

『信貴山資材宝物帳』

飛鳥戸糺子施入田壹反、右大県郡山上二条字名子者、加佐志谷上

承平元年（九三一）

これによると二条通りの山上で、加佐志谷にある一反の田地が、飛鳥戸糺子によって施入されている。

『荒陵寺御手印縁起資材帳』

田藪

大県郡薦間里肆箇坪壹阡捌佰代

麻生里貳佰貳拾代

先の信貴山資材宝物帳には条名があるが、荒陵寺御手印縁起資材帳には条名が見えない。薦間里や麻生里が郡内のいかなる場所を指すのか不明で、地籍に見られる字名にもなく今後の検討が必要である。

第2節 古墳群

調査した古墳群は、平尾山古墳群の平野・大県支群、大平寺支群、安堂支群、本堂支群、雁多尾畑支群、平尾山支群、青谷支群、高井田古墳群である。それぞれの古墳群について調査した項目について概説する。

4. 平野・大県支群

当支群は、生駒山地西側丘陵部に存在し、標高277mの高尾山が中心部に聳え西麓部の集落遺跡と接している。

古墳は、27支群135基が確認されており、前方後円墳2基が含まれている。埋葬施設は、横穴式石室が主体で他の施設の確認はされていない。当支群内の古墳に鉄滓が供献されたものが

あり、大泉遺跡を中心とした鉄器生産集団との関係が問われている。

当支群は、割合急峻な尾根が多いので古墳等の保存は良好である。近年、関電道路添いにゴルフ関係の施設が造成され、開発の波が押し寄せている。また、府民の森構想によって緑化運動から木々の植樹によって文化財の保存に良好な環境もある。

当支群内に奈良時代前後の仏足石と火葬墓群が存在していた伝聞があり、2、3の場所を重点的に踏査したが下草が大きく生茂り関係する遺物も発見されなかった。当支群内に在る高尾山山頂遺跡及び西麓部寄りの斜面地から土器及び石器が表採された。弥生時代以降の集落遺跡が存在すると考えられる。新規に発見した古墳は、21基である。

5. 太平寺支群

当支群は、生駒山地西側丘陵上に存在し、標高166mの天冠山が中心部にある。古墳は、6支群48基が在り、前方後円墳4基が含まれている。埋葬施設は、横穴式石室、木棺直葬、横穴古墳がある。前期に属する古墳はないが、中期以後の埴輪を持つ古墳がある。また、当支群内にも鉄滓が出土する古墳があり、鉄器生産集団との関わりがある。

現状は、古墳の保存は良好であるが、丘陵尾根端部まで開発の波が広がり、小規模な土砂採土や農地改良等が増加しつつある。

丘陵裾の斜面地から土師器や須恵器の土器を採集した。集落遺跡か古墳等に関わる祭祀遺物であるか不明である。

6. 安堂支群

当支群は、生駒山地西側丘陵上に存在し、標高117mの安堂山を中心とした支群である。7支群36基があり、前方後方墳1基、前方後円墳2基が含まれる。埋葬施設は、横穴式石室を主体として竪穴式石室と横穴古墳がある。前期から後期にかけての古墳が群集する。当支群の大部分に奈良時代以降の集落が出現するが、この時木棺直葬の古墳が破壊されている事例が多い。また、支群内に河内六大寺の1つ高井田廃寺（鳥坂寺）が建立されるが、この寺院に関連した古墳があり、鳥取氏の居住地との説がある。

低丘陵であることから開発が盛んに行われ、丘陵下方で住宅地や宿泊施設等が造成された。しかし、この内古墳や居住関連遺構は記録保存されたが緑地として保存されている古墳も多い。今後小規模な開発や農地改良工事が増加する事が考えられる。

丘陵上方の古墳は、果樹園や山林等であまり変化なく保存状態も良好である。古墳の存在するぶどう畑内や表土が露出している場所から埴輪や土師器の散布があり、前期から中期にかけての時期の古墳である事がわかった。しかし、竪穴式石室に使用される石材や葺石の存在は確認されなかった。

7. 本堂支群

当支群は、標高350mの長尾山を中心とした生駒山地東側丘陵内部にある支群である。古墳が位置するのは、奈良県三郷町へ向かって流れる本堂川の上流の北側丘陵尾根上である。河内平野より奈良盆地の平野の方が距離的に近い。また、古墳からの視界も奈良盆地が望める。

現在5支群16基の古墳が確認されている。今回の調査ではほとんど影響範囲に入らないので調査は、民俗以外は除外した。

8. 雁多尾畑支群

当支群は、生駒山地西側丘陵の尾根上にあり、南北方向2,000m東西方向2,400mの大規模な範囲に広がる。

現在確認されている古墳の数は、56支群445基の古墳がある。墳形は、ほとんど円墳である。埋葬施設は、横穴式石室が大半を占めるが、横口式石槨や木棺直葬が各1基確認されている。農地改良や開墾によって削平や盛土が行われているが、完存した古墳も多いことから今後調査例が増えれば横口式石槨や木棺直葬も増加する事が考えられる。

この支群から出土する遺物の中に鉄鉗とかんざしがある。両者ともに出土例の少ない遺物であり、被葬者の生活を知るための特異な資料である。前者は、大県遺跡を中心とした鉄器生産集団の墓域とした平野・大県支群との関わりが注目される。

現状は、果樹園栽培の衰退によって丘陵上部の方から徐々に行われなくなり、農地改良や谷筋部を中心とした残土廃棄工事が増加しつつある。一面では古墳の保存が守られているが、平野部の開発によって生じた残土等を搬入してきた車両がその帰路に丘陵の土砂を搬出する事も多い。

9. 平尾山支群

当支群は、生駒山地西側丘陵の尾根上にあり、南北方向1,400m、東西方向1,800mの範囲に広がる平尾山古墳群の中心部に位置する。

古墳の数は、69支群574基があり支群別では最大規模である。墳形は、円墳がほとんどと考えられている。埋葬施設は、横穴式石室が大半を占めるが、横口式石槨3基と竪穴系小石室十数基ある。

当支群は、先の雁多尾畑支群と同様古墳の基数や均質性から政治的編成による形成が論じられている。つまり、これらの古墳に被葬された人々は、先学の白石氏の論考を参考にするならば、「大和政権を構成する有力氏族」が「大規模な擬制的同族集団」を構成して「共通の墳墓地域の形成」を行ったとしている。また、その成因となる古墳を構築する共同体の成員は、近藤義郎氏は、共同体の分析とそれにとまなう奴隷主的な家父長制家族の成立を示すとし、西嶋

定生氏は、共同体の変質にともなう新しい階級の成立に直接対応するものではなく、それはやはりカバネの賜与を媒介とする大和政権の身分秩序の一層の拡大を反映するものとされている。

現状は、丘陵全体が開発の波に浸食されつつあり、数多くの古墳が破壊されさらに進行しており開発指向が顕著である。丘陵下方から住宅開発や土砂採集が迫り、上方は農地改良に伴う土地改変が行われている。古墳は、標高236mの小松山を中心とした丘陵尾根筋上や尾根の南側斜面に密集して構築されている。

今回の調査において新たな古墳4基を発見した。

10. 青谷支群

当支群は、丘陵内部のさらに東側に位置し、直ぐ南側に大和川が流れる。範囲は、南北方向2,000m、東西方向2,000mに5支群11基の古墳が確認されている。雁多尾畑支群や平尾山支群とは違い密集している状況は見られない。

当支群には、製鉄に関連すると言われる金山彦神社、金山媛神社があり、その関連する遺物（鉄滓）が収集されている。この鉄滓については、山本博先生によって古くから注目され古代鉄器生産集団あるいは国家権力による統制があった可能性を追求されている。嶽山周辺や「焼きあと」、「笠松」からも鉄滓が出土している。

現状は、東側の亀ノ瀬地回り地は対策工事によって土地改変が顕著である。その他の部分は、一部果樹園栽培が行われているが、山林として遺され開発はほとんど進行していない。

今回の調査の対象とした場所は、ほとんど遺跡が確認されていない。古墳は、発見されなかったが、古墳状隆起場所が尾根筋上に数ヶ所確認した。山城の烽火台があったと予測される場所が丘陵尾根先端部に確認した。あまり広くはないが、平坦な面を持ち眺望が良好である。

11. 高井田古墳群

当古墳群は、生駒山地南西端部の集落遺跡に接する位置にあり、南北方向500m、東西方向1,000mの範囲に横穴古墳が4支群157基と横穴式石室1基が確認されている。

横穴古墳の第1支群を除いて他の支群が国史跡指定されており、現在史跡公園化が計られている。横穴古墳の被葬者は、線刻壁画に描かれたゴンドラに乗る人物像や出土遺物から渡来系氏族が考えられているが、近年初期横穴式石室を内部主体に持つ古墳が検出され、舶載された火慰斗や漢式の画像鏡を伴い陶邑編年第Ⅰ-4段階の初期須恵器が出土していることからさらにその系譜や時期変遷を考える上で一石を投じている。

今回の調査の対象範囲に入れなかった。

第3節 民俗

今回の調査の目的として対象とした項目の中に民俗に関連した道標、記念碑、堂祠、石仏部について既に確認されているものを調査対象範囲とその周辺部に限定して再調査した。対象とした地区の既存の個数は、下記の通りである。

①古町2丁目	道標	⑩大平寺1丁目	子安地藏堂
②上市2丁目	妙見宮跡記念碑	⑪大平寺2丁目	タイコダイ倉庫
③上市2丁目	記念碑(五基)	⑫大平寺2丁目	姫森(ヒメノモリ)
④上市2丁目	地藏堂	⑬大平寺2丁目	延命虫切地藏尊堂
⑤上市3丁目	地藏尊	⑭安堂	地藏堂
⑥上市3丁目	不思議地藏尊	⑮安堂	地藏堂
⑦上市3丁目	地藏尊	⑯青谷	地藏堂
⑧上市4丁目	地藏尊	⑰青谷	清蔵堂
⑨平野1丁目	岩切不動尊	⑱青谷	地藏堂
	大日如来	⑳青谷	墓地
	勢至菩薩	㉑青谷	天照皇大神宮 拜所
	観世音菩薩	㉒青谷	打越行者堂
	虚空蔵菩薩	㉓青谷	大門所地藏堂
	普賢菩薩	㉔青谷	青谷墓地
	阿弥陀如来	㉕青谷	田尻地藏堂
	大師像	㉖青谷	ワング地藏堂
	弘法大師腰掛石	㉗青谷	ハツオサン
⑩平野2丁目	青谷不動明王	㉘青谷	ショガミ地藏堂
⑪平野2丁目	供養之碑	㉙雁多尾畑	子安地藏院
⑫平野2丁目	タイコダイ倉庫	㉚雁多尾畑	杉森(スギノモリ)
⑬平野2丁目	道標	㉛雁多尾畑	畑墓地
⑭平野2丁目	地藏堂	㉜本堂	墓地
⑮大泉4丁目	大泉墓地	㉝本堂	庚申塚



図-3 柏原地区の民俗

第4章 ま と め

今回行った分布調査の結果に基づき各遺跡群の保存に対する問題点をあげ、今後の国道25号線バイパスのルート決定にあたる参考資料となるべき責を果したい。

第1番目として、大県郡条里遺構の開発時期や範囲について、発掘調査による遺構や遺物が検出され検討を加えている事例はなく明確でない。文献や現在まで遺存している方形区画の条里から限定しており、開始時期や範囲だけにとどまらず道路や水路、畦畔等多くの確認すべき事項があり周辺地域についても調査の対象とすべきである。条里の起点がどこにあるのかも重要で、大県郡衙や三宅寺、大里寺、駅家の位置にも関係する。

第2番目として集落遺跡は、今回の調査では住宅密集地や開発が顕著な場所が多く遺物の採集は困難であった。周辺の遺跡群は、縄文時代から継続した複合遺跡で、特に古墳時代中期以後鍛冶による鉄器生産を専門的に行った跡の遺構や遺物が多数検出されており、大和政権の一端を担った豪族又は氏族が居住した事が考えられる。現在、その範囲は、西側を恩智川までとしているが、遺跡密度の高い地域である事や遺跡深度が深い事からさらに拡大する可能性もある。今後の検証が必要である。

第3番目として古墳群がある。東山一带に非常に多くの古墳群が群集しており、特に古墳時代後期の古墳群の性格や変遷については前章で述べた通り大和政権を構成する有力氏族との関わりが強いとした。しかし、現在まで発掘調査を実施した古墳が稀少であり、副葬された遺物による古墳の時期決定や小支群の中の古墳変遷あるいはその性格等を考慮するという基礎的な作業がのこされている。古墳の保存については、極力古墳の密度が薄い地域あるいは存在しない地域へルート選定することが必要である。また、分布調査によって古墳が発見されていない場所で試掘調査及び発掘調査を実施した時に新規発見古墳がある場合も多数報告されている。

(田辺古墳群、雁多尾畑49支群など) 後世の削平や盛土あるいは自然崩壊等実にさまざまな要因で知り得ない古墳が地下に眠っている。

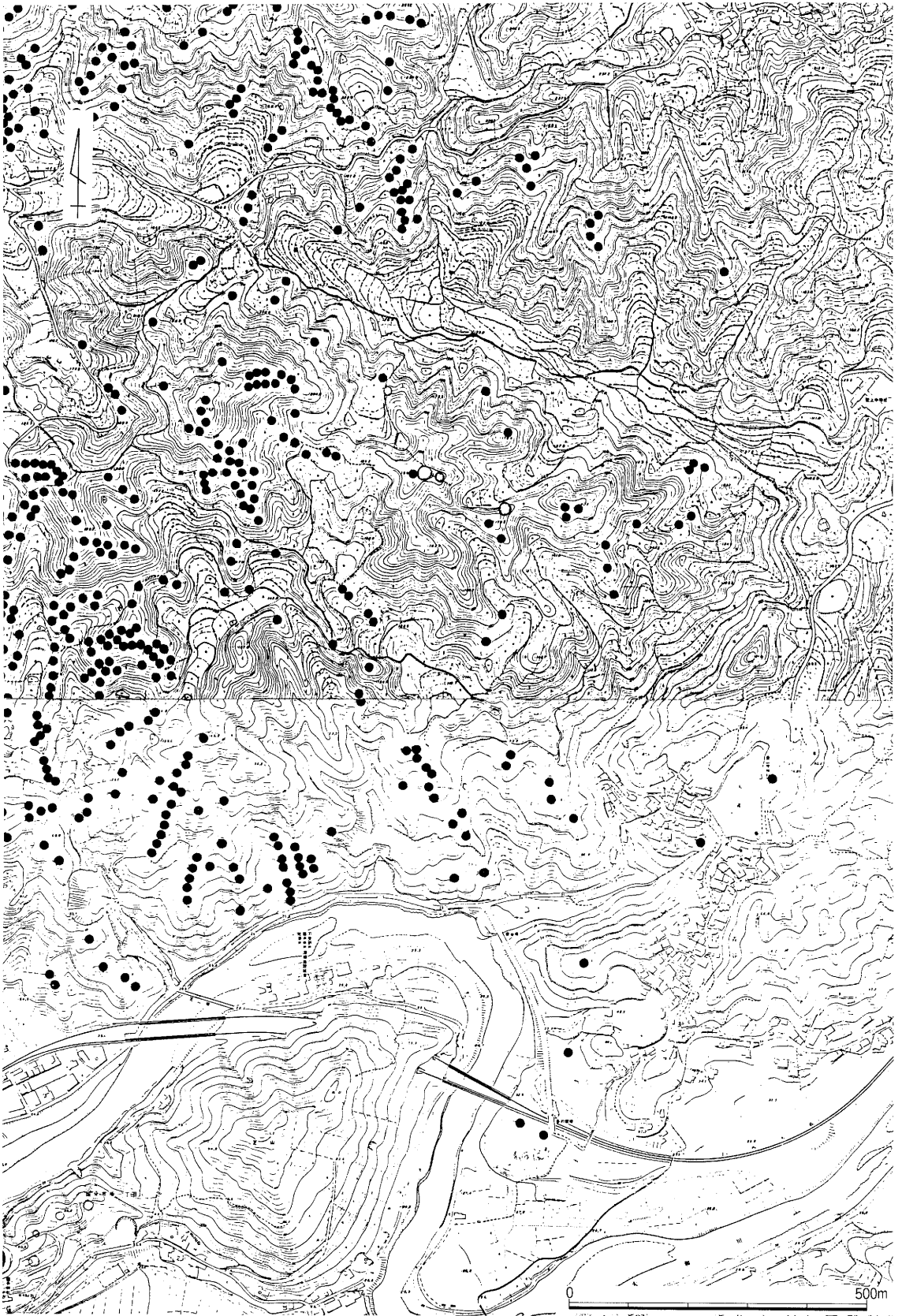
第4番目は、青谷支群内で採集される鉄滓についてである。これは、竜田山「笠松」「焼きあと」から出土した鉄滓や「とめしよの山」出土鉄塊が何時、誰がどのような理由からこの場所へ排棄(又は埋納)したのか。また、鉄滓が出土する範囲がさらに拡大されるか問題である。

参考文献

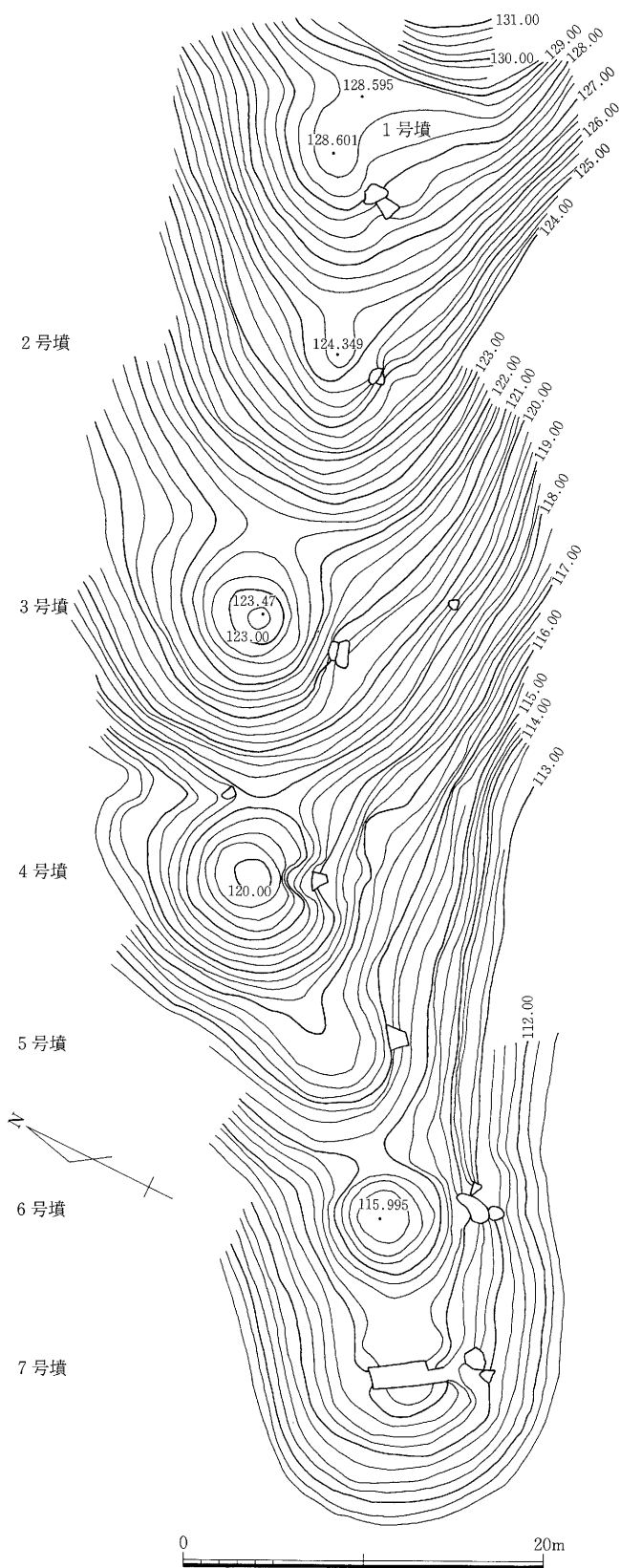
- 山本昭「古代の柏原」『柏原市史』第2巻本編Ⅰ 1973
柏原市教育委員会『大県遺跡』柏原市文化財概報1988-II 1988
柏原市教育委員会『田辺古墳群・墳墓群発掘調査概要』柏原市文化財概報1986-Ⅳ 1987
柏原市教育委員会『平尾山古墳群』柏原市文化財概報1988-VII 1989
山本博『古代の製鉄』学生社 1975
古代を考える会『河内・大県遺跡周辺の鉄・鉄器生産の検討』古代を考える53 1991

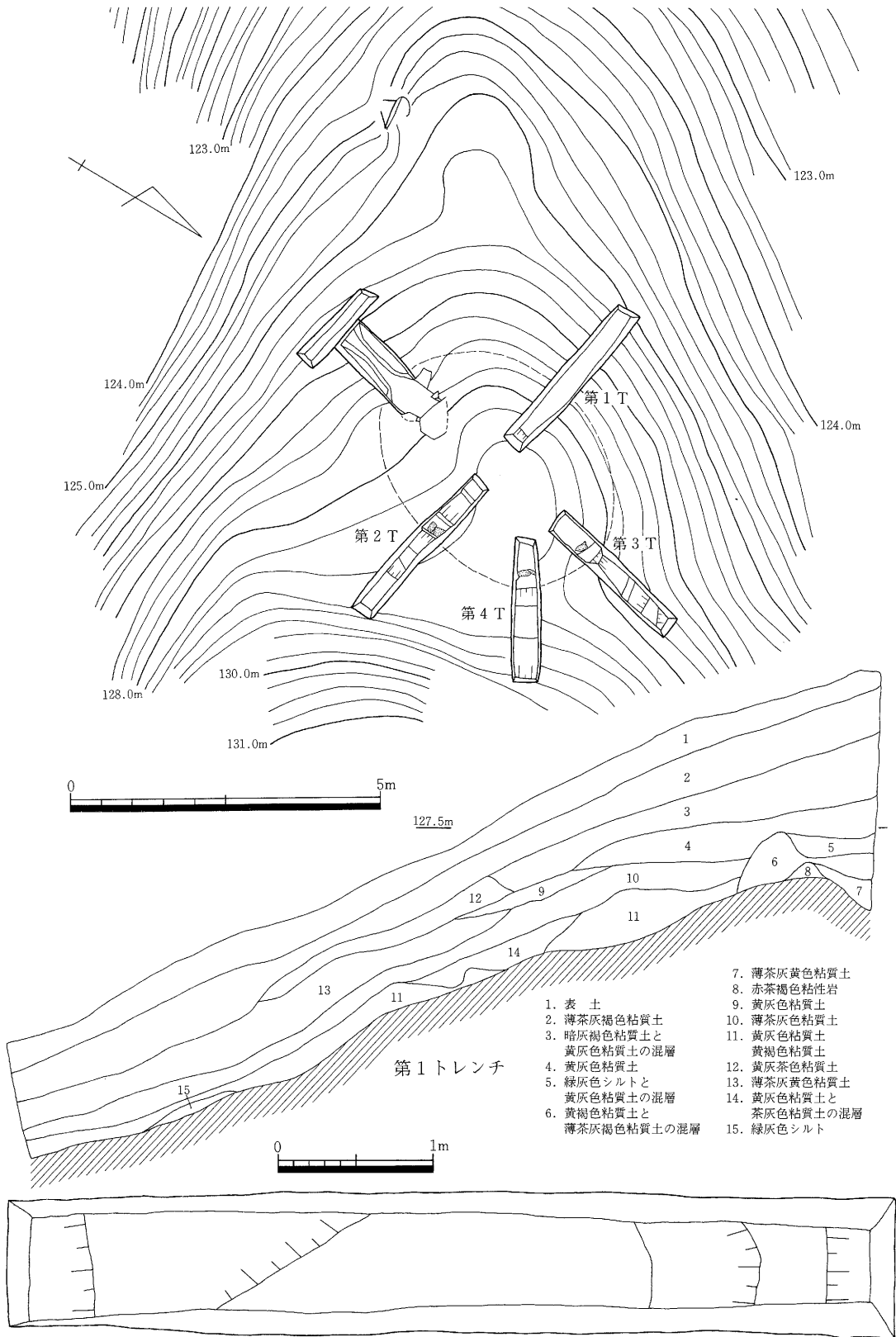
版 図

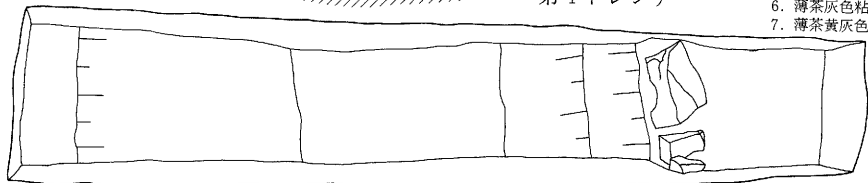
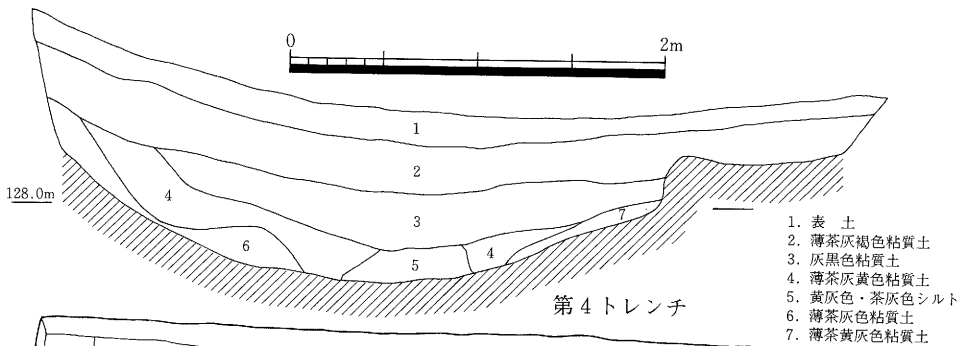
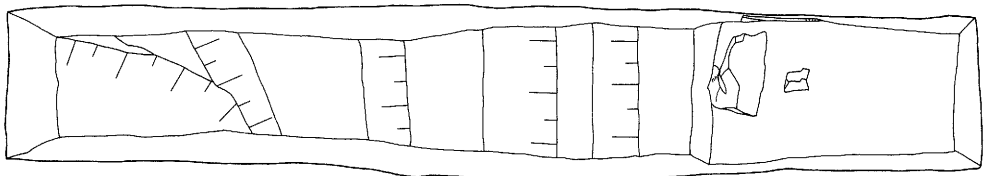
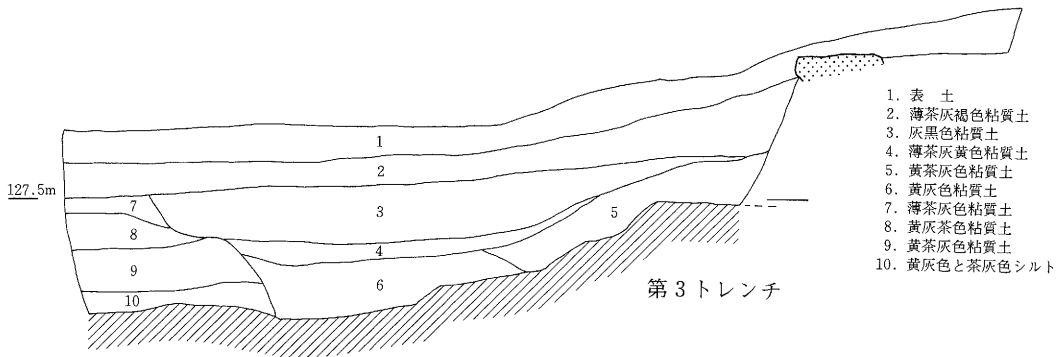
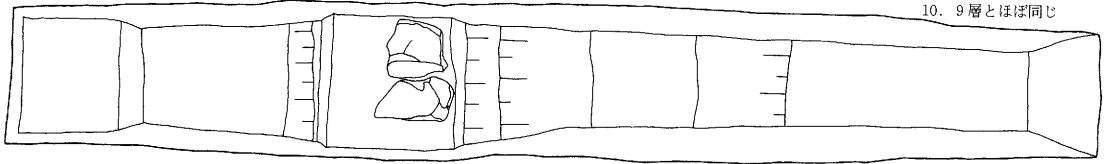
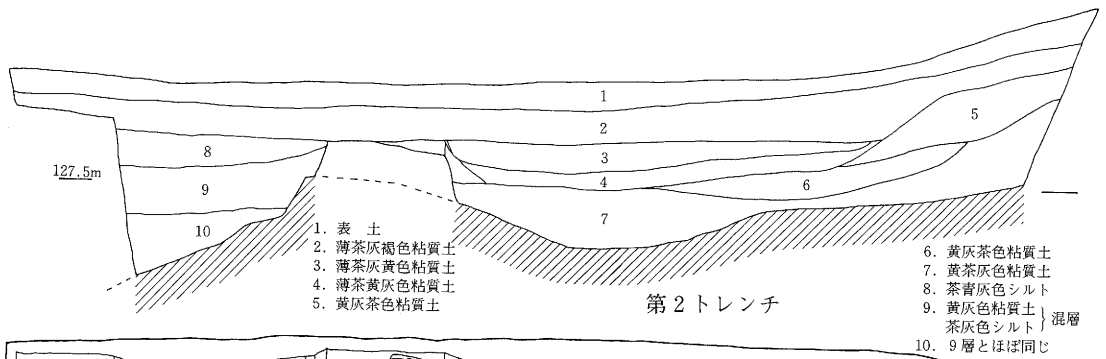




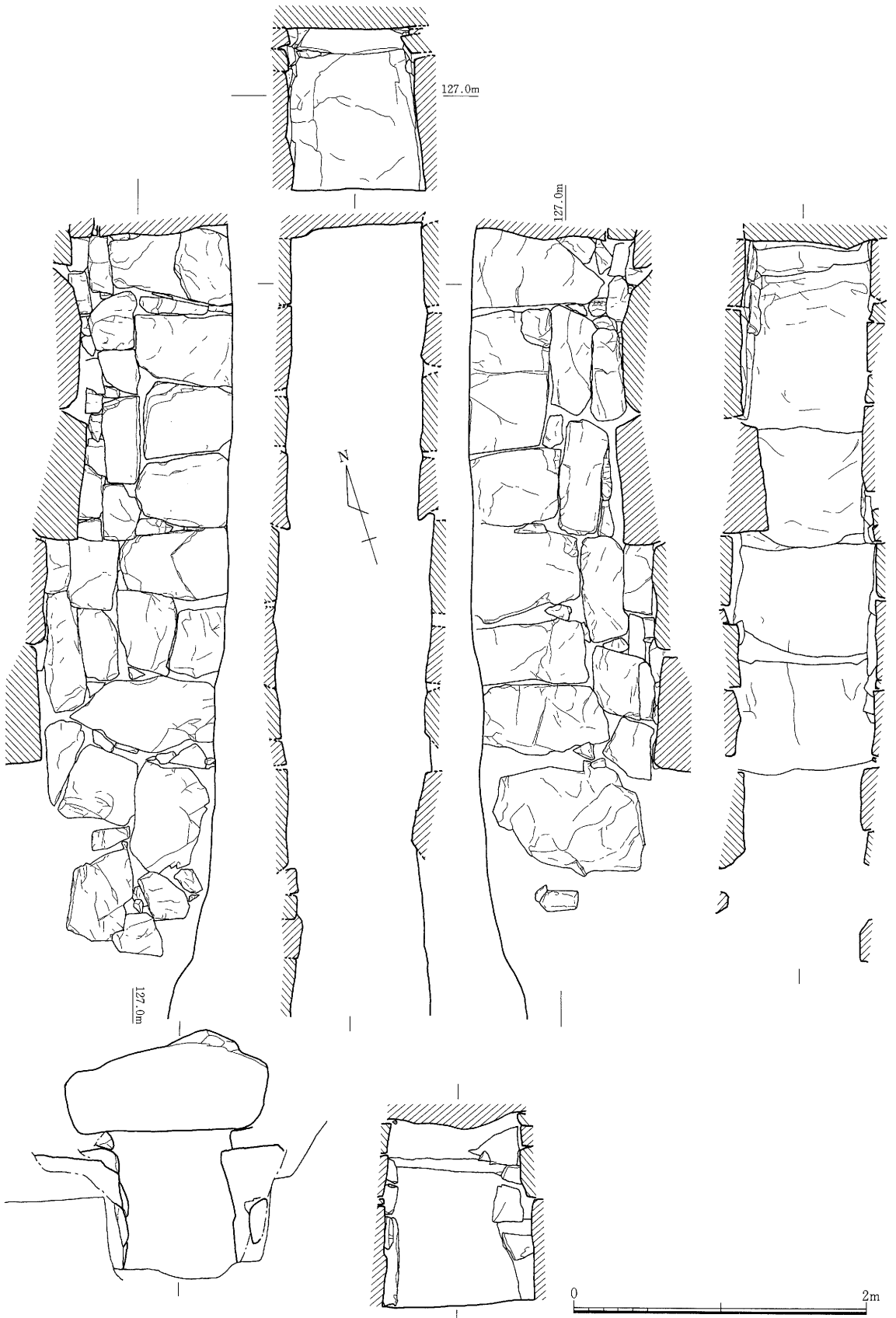
图版三 平尾山支群第十三支群地形测量图



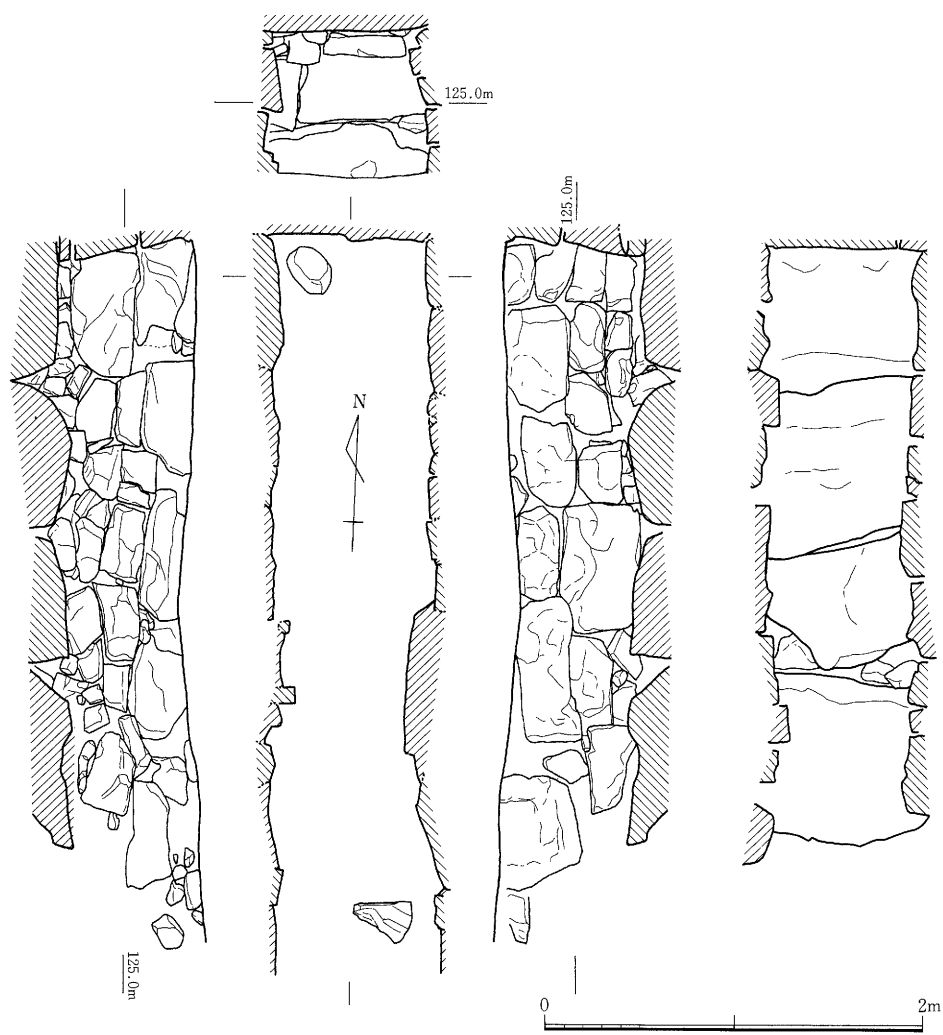


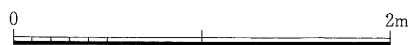
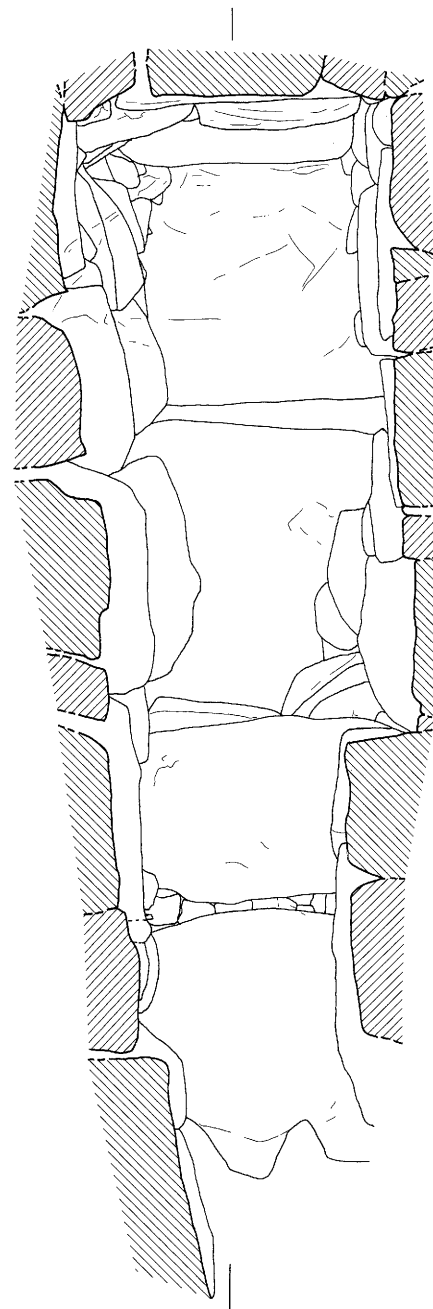
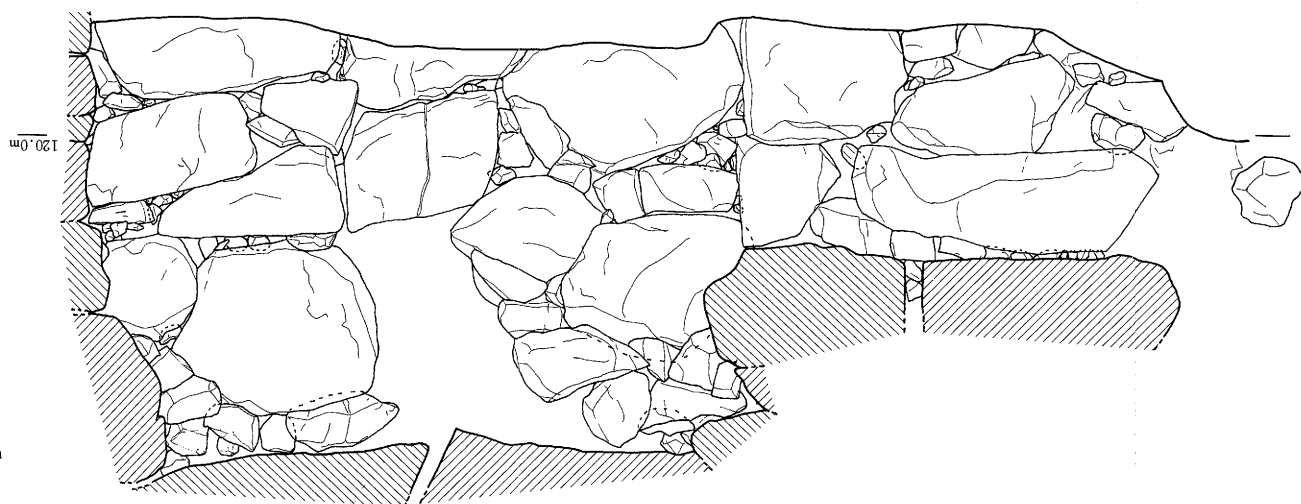
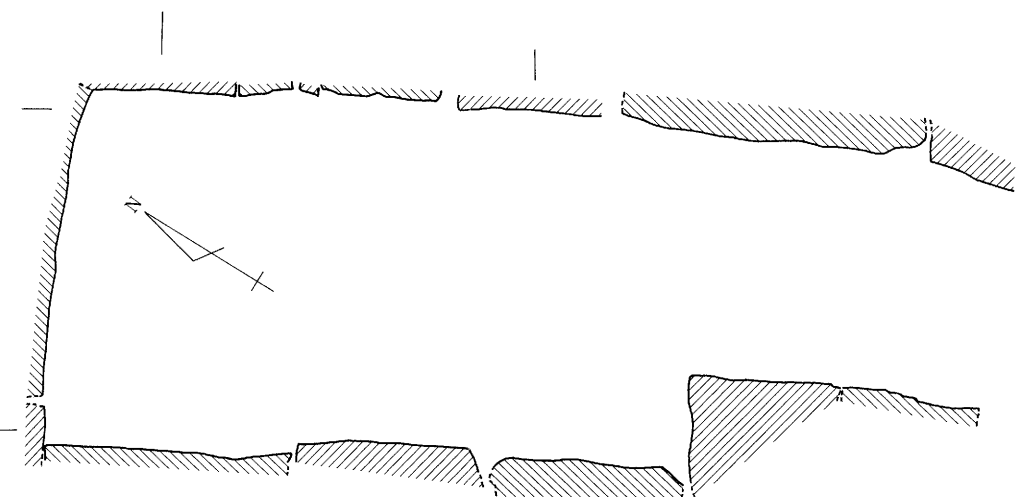
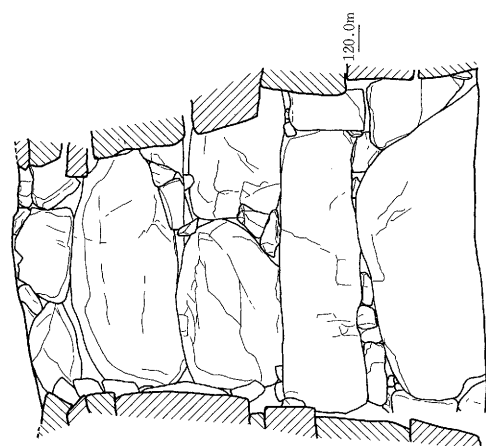
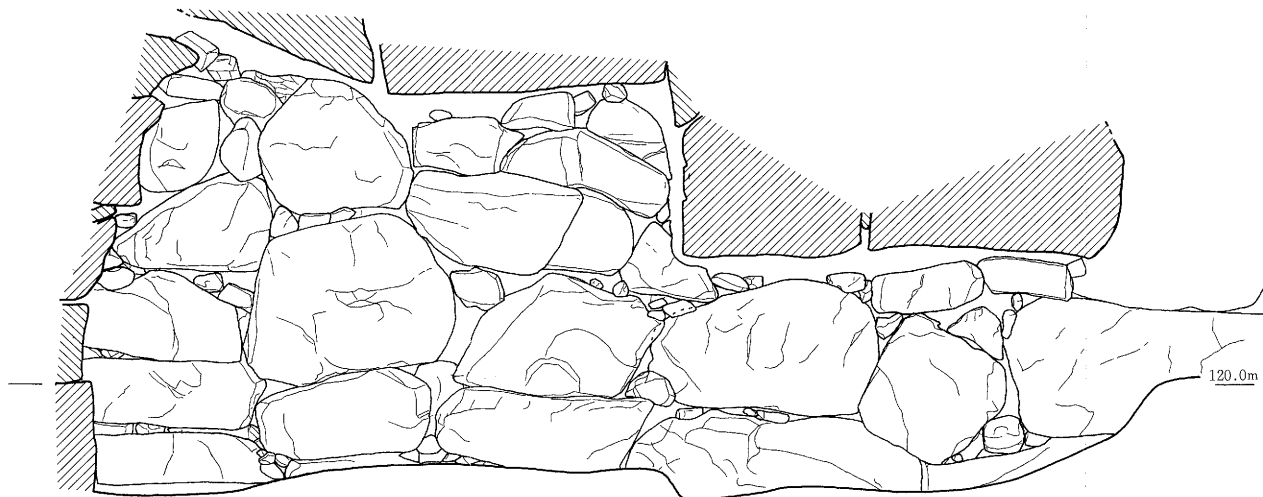
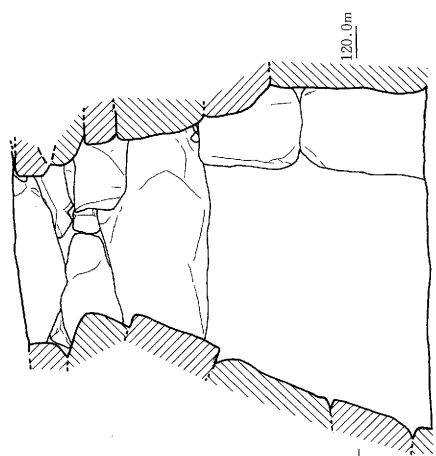


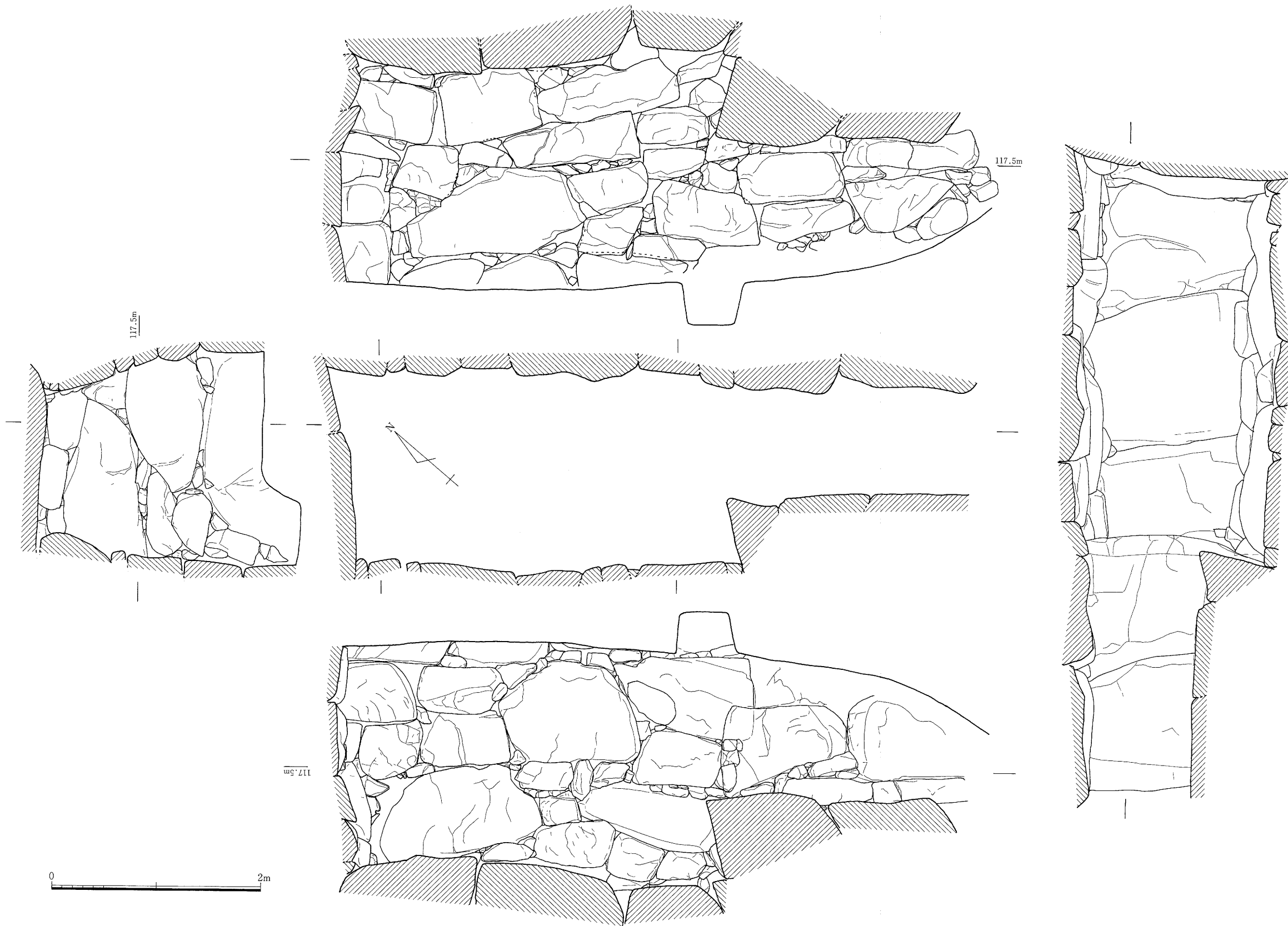
図版六 平尾山支群第十三支群一号墳

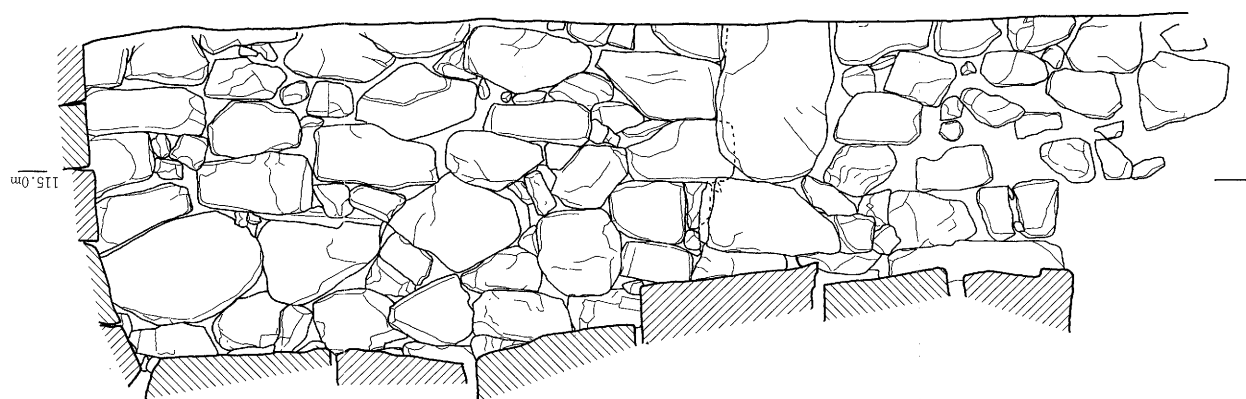
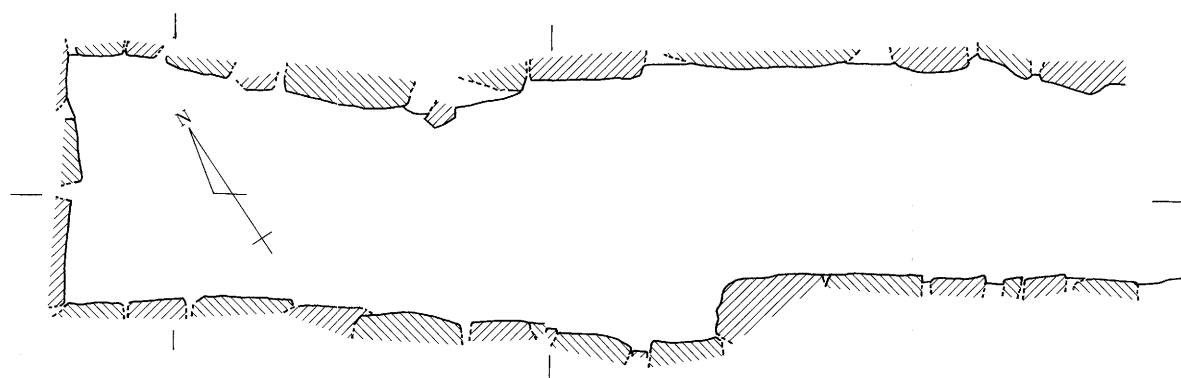
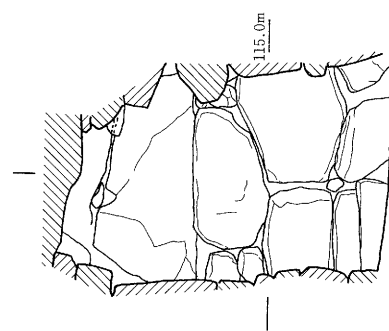
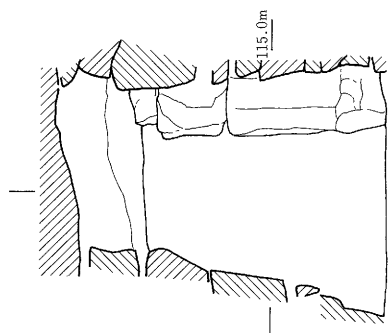


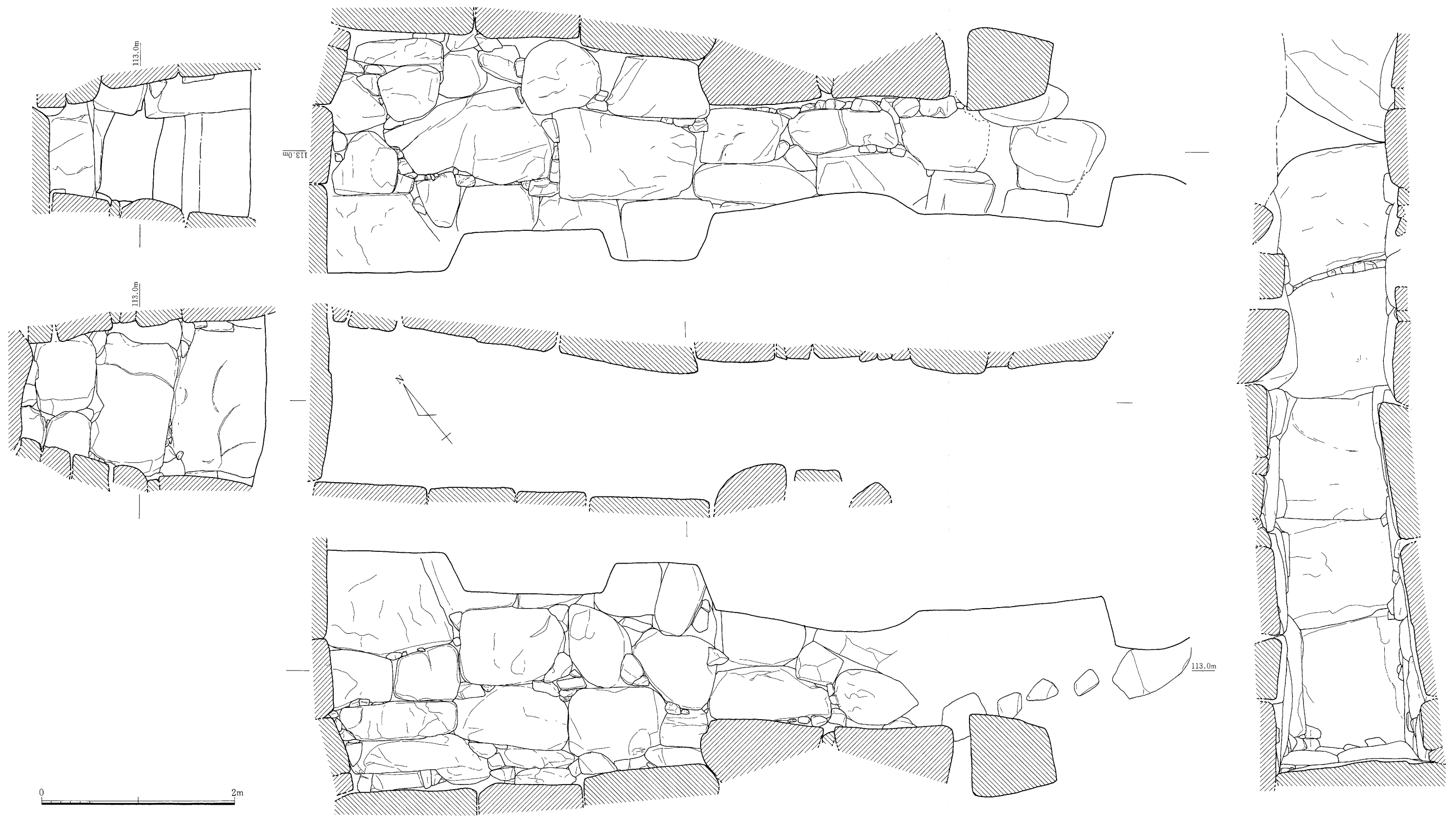
図版七 平尾山支群第十三支群二号墳

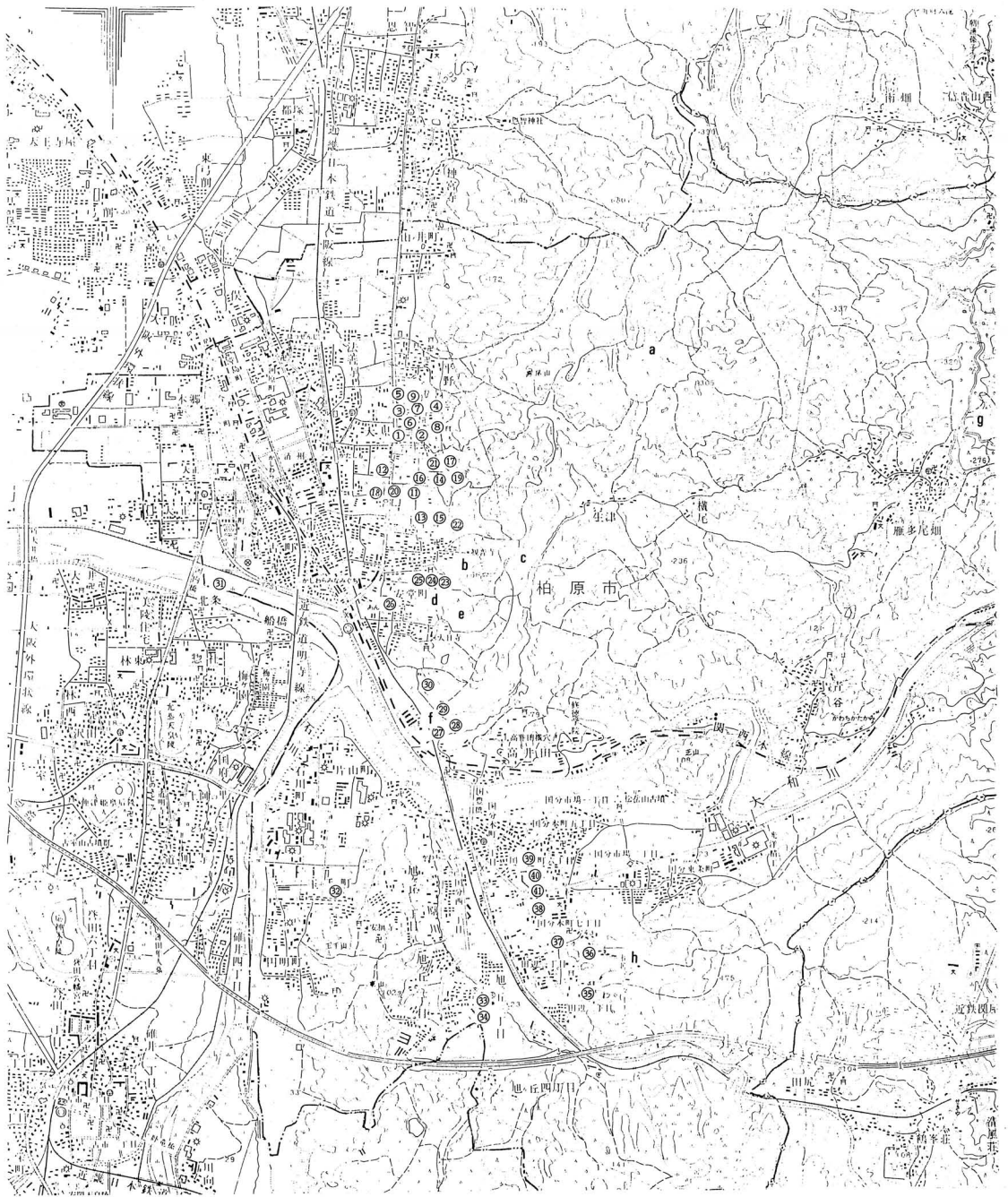












- | | | |
|-------------|-------------|---------------|
| 1～10 大県遺跡 | 27～30 高井田遺跡 | 35～41 田辺遺跡 |
| 11～22 大県南遺跡 | 31 船橋遺跡 | (40は今回の調査区) |
| 23～25 太平寺遺跡 | 32 玉手山遺跡 | a～h 古墳、古墓、散布地 |
| 26 安堂遺跡 | 33・34 原山遺跡 | |



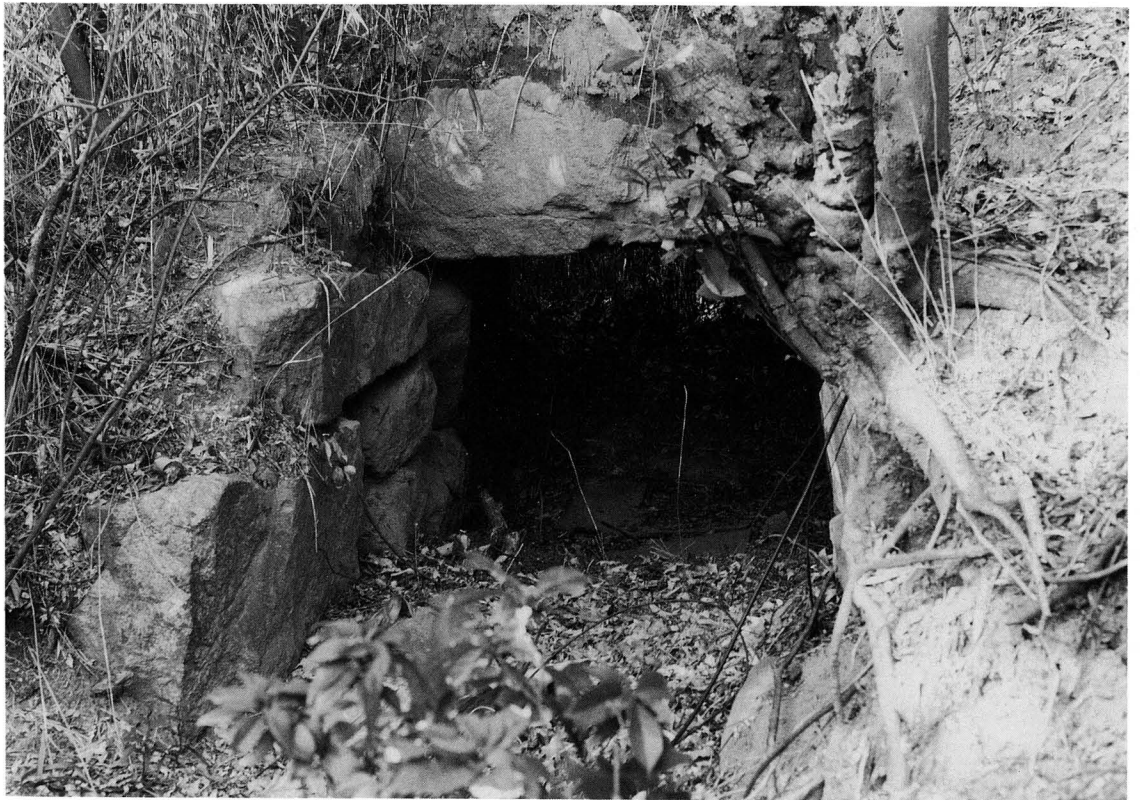


新規発見の古墳



第5支群1号墳





第6支群1号墳



第6支群2号墳



第6支群3号墳



第13支群 7号墳



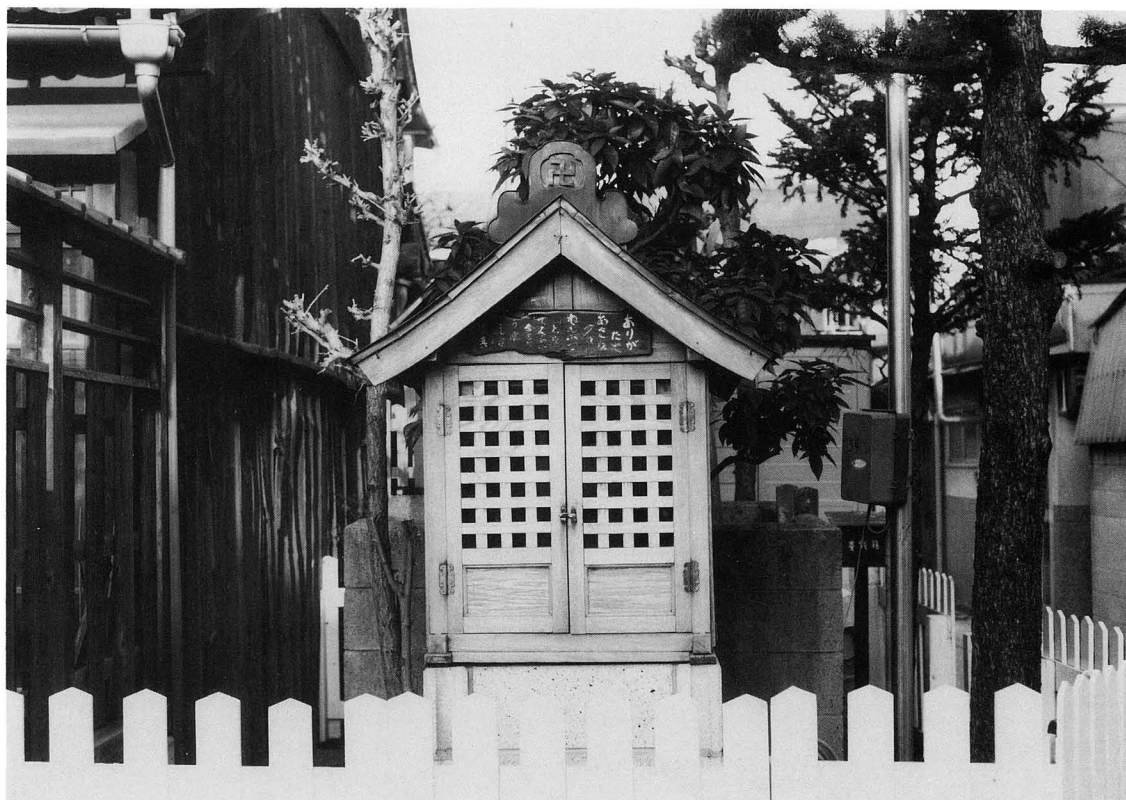




光徳寺



金山彦神社



柏原地区・不思議地藏尊



平野・大県支群内道標

柏原市東山地区分布調査概報

1991年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501

発行年月日 平成4年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

